



913.41
K0544

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
------	------	-------	--------	-----	---------	-------	---------	-------

© Kodak, 2007 TM: Kodak

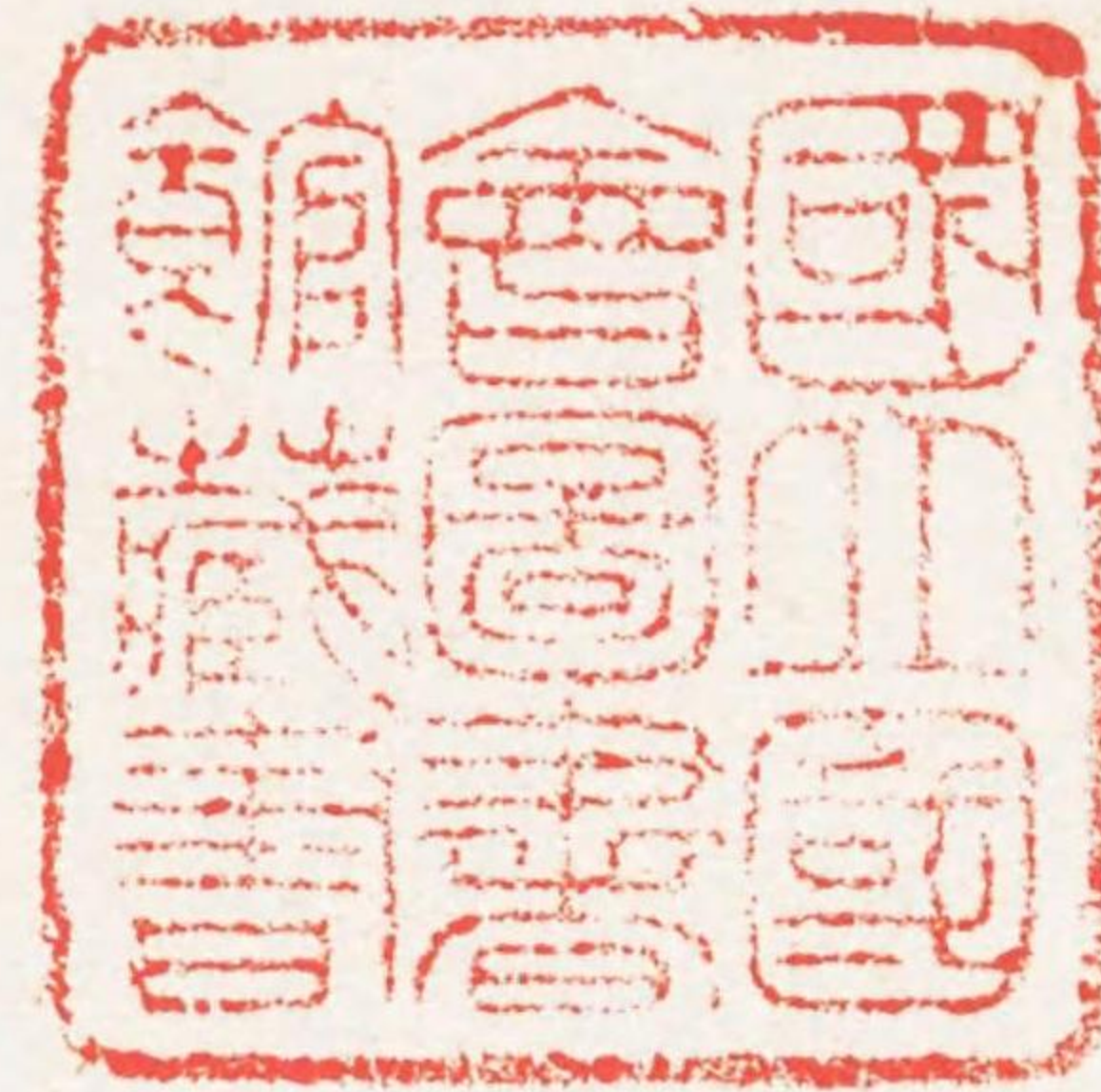
inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

Tealima

JAPAN



216501



前田本苔衣解説

尊經閣叢刊昭和戊寅歳の計畫に係るものの一として、前田侯爵家藏苔衣四冊の複製本が頒行されることになつた。今この書の外観内容の一斑を簡単に摘記して、通讀者の參考に資したいと思ふ。

前田本の原本は、縦七寸七分五厘、横五寸五分の胡蝶装四冊本で、料紙は楮紙、金爛裂地の表紙の中央に、朱地金泥雲形の模様ある題簽を押し、これに「こけ衣」各冊それぞれ春、夏、秋、冬と記す。筆者はほぼ寛永延寶の頃の公卿の筆に成るものと思はれるが、その何人たるかは不詳である。傳來事情その他も亦一切不明である。

書名は前田本の題簽に「こけ衣」とあり、彰考館藏本に「古計衣」とあるやうに、「の」の字を省くものが多いが、讀む時にはこれを加へるのが正しいかも知れない。何となればこの書名は、已に黒川春村が指摘したやうに、卷一發端の文に「夫の書名は、金葉集の題簽に「こけ衣」とあり、卷三に「野史本を檢行せしむるに、この書の

山嵐のけはしきに苔を衣として風をふせぎてのみ過し侍る
 (中略)綾羅錦繡にも苔の衣草の枕はこよなくかへまさりに侍りぬべければ、菜つみ水汲みても彼の世界へ參り侍らんこそ年頃の願ひにて侍らめとて、いと口惜しくおぼしたる御けしきは、いひ知らず愛たく見奉れば、例のさほうに取まかなひて

やつし果て給ひぬれば、しうせんの苔の衣着給ふとて、こけの衣にたちぞかへつ
 とぞながめられ給ふ。二卷の題簽に「こけ衣」とあり、彰考館藏本に「古計衣」とあるによつたものであらうと思はれるからである。この物語の作者は不明である。成立年時も亦不詳であるが、これについては已に春村が「其詞づかひや、後ざまに聞えたれば、恐らくは建長頃などに作り出し物なるべし」と推定してゐる。この推定はあたらすと雖も遠からざるべく、先づ大體鎌倉時代の初期から中期までの間に成つたものとすべきであらう。その故は建久五年の成立にかかる上覺の和歌色葉集にこの物語の名は見えず、又文治五年以後建仁二年以前の成立と推定されてゐる無名草子にも亦同様に見えないにかかはらず、文永八年に成立した風葉

和歌集に至つてはじめて、戀五及び雜一に各一首づつこの書から採つた歌が見えてゐるからである。この風葉集に採られた歌は、苔衣の歌にして他書に引かれた最初のものであるが、全體の歌九十九首の中、僅かに二首しかとられてゐないのであつて、この事實は、この物語が成立も新しく、又あまり世に行はれてゐなかつた事情を示すものであらうと推定されるのである。苔衣は、構想の點から前編と後編とに分けることが出来る。前編は、左大將を主人公とし、その北方を女主人公として、二人の不幸な一生をゑがいてをり、後編は兵部卿宮の失意の生涯を中心としてゑがいてゐる。總じて三代の社會をうつし、無常なる人生と運命をゑがいた哀愁の色の深い小説である。この物語は未だ一度も刊行されたことのないもので、あまり世間にも知られてゐないやうに思はれるから、閲讀者の便を圖るため、次に簡単な梗概を記

し、系圖を示すこととする。

二

前編(卷一より卷三に至る)

昔、故先帝の御弟、一世の源氏に二人の公達があつた。兄は左大將、弟は權大納言(この物語前編の主人公)である。大納言は兄左大將にまして世の人望があつた。しかし兄弟の仲は圓滿ではなかつた。

大納言には北方が二人あつた。その中の一人は兄左大將の三の君で、大納言がまだ三位中將であつた時に結婚したが、早くから夫の愛を失ひ、子供もなく、今は六條院の東院に不幸な月日を送つてゐる。他の一人は故中務卿宮の姫君で、今の關白の北方の妹にあたる。美貌の故に、大納言の愛を一身に集め、今は六條院の西院に住み、大納言との間に、少將と童君との二子を儲け、頗る幸福に暮

してゐる。兄は七歳の時に元服して少將となり、弟も亦七歳にして童殿上をなした。やがて、少將は中將に童殿上の君は侍従になつた。

西院の上の姉は前齋宮で、關白の北方となつた。子供としては姫君一人だけで淋しがつてゐたが、後に男君が生れた。その若君は光源氏に比べられるほどの美しい子であつた。關白は八歳の夏姫君の袴着の式をあげ、やがて東宮に奉らうと考へてゐたが、十一歳の年いよいよかねての宿望の如く入内させた。時に東宮は十二歳であらせられた。

大納言と西院の上とは、若君のみで女子のないのをなげき、石山寺に參籠して觀音に起請すると、ある夜の夢に美しい女房の姿をかりた觀音が現れ、二葉より異なる花はえたりとも盛の春は見もし果てじを」とやがて生れるべき女の子の前途を豫言して花の枝

をたまはつた。まもなく懷妊、翌年の五月、宿願通り美しい姫君を産んだ。この姫君こそ本物語の前編の女主人公である。この人の不幸な生涯は、早くも夢枕に立つた觀音の豫言した所である。當時後宮には中宮、弘徽殿女御、梅壺女御の三人の後女御が立つてをられた。君寵の最もあつた中宮は、關白の妹、東宮の御母であられ、弘徽殿女御は左大將の長女、梅壺女御は右大將の女であつた。翌年、右大將は病氣のために薨じ、大納言が後を襲うて右大將となり、左大將は内大臣を兼ねることとなつた。

夏頃、西院の上は、石山觀音の利生によつて姫君を生むこととなつたので、東院の上は、いよいよ自分の孤獨が悲しまれ、その姉にあたる式部卿宮の北方の姫君(當時八歳)を引取つてかしづき、わづかに物淋しさを慰めてゐた。

内大臣の長女たる弘徽殿女御は、この頃姫君を生んだが、この女

御は元來病弱で、産後の肥立が悪く、つひに逝去した。父の内大臣は長女に先き立たれた悲しみから、次第に健康を害し、はては重い病床に臥す身となつた。臨終の際、かねて不和であつた弟の右大將も見舞に來たので、内大臣は東院の上のことと、式部卿宮の姫君のこととを懇ろに依頼して薨去した。やがて右大將は内大臣に昇進した。

翌年の二月十日の頃、かねて志しつつも延引してゐた西院の上の姫君の裳着の儀が行はれた。時に姫君六歳。八月には東宮の女御(關白の姫君)が男宮を御出産。帝をはじめ大宮の御喜びは限りなく、帝は機を見て御讓位になりたく思召された。その頃帥宮(系譜明かならず)は北方を喪つて寡居してをられたので、東院の上はこれに自分の養女たる姫君(式部卿宮の姫君)を娶合せようと考へ、内大臣が躊躇するのを押して十一月その事を行

はうと準備した。かうして帥宮は姫君のもとに通はれることとなつた。

年もかはつた。帝は東宮の御子のうつくしき御成長を御覽になつては、も早や何等後顧の憂へもないとお考へになつて、四月朔日頃、東宮に御讓位になり、冷泉院にお移りになつた。その頃から西院の上の健康はすぐれず、夏を越し秋になると病は益々篤く今は限りと思はれるやうになつた。後に残す三人の子供(長男の中將、次男の侍従、末の姫君)の將來が案じられ、枕邊に姉(關白北の方)を招じて懇ろに後事を依頼し、その翌夕、三十六歳を一期として他界したのであつた。

あとに残つた三人の遺兒の中、中將は時折兵衛内侍のもとに通つたりするほど成人し、侍従は幼い時から亡き母上の從妹たる前齋院(兵部卿宮)の姫君に養はれてゐる。ただ姫君だけはまだ幼く

不安心なので、東院の上に引取られて養はれることになつた。しかし東院の上となき母とは、かねてから不和であつたから、姫君の生活が幸福であらう筈はない。とにかく、かうして遺兒の始末がついたので、中將は、母の住んでゐた西院に住むこととなつた。

内大臣の姫君(今東院の上に養はる)は十四五歳になり、美人の譽れが高かつた。中宮(關白の姫君)の御弟三位中將は、音楽に長じ、西院に住む中將(内大臣の次男)と親交がある。八月十日あまりの月の美しい夜、三位中將は友人の中將を東院に訪ねた。折から管絃の遊びが催されてゐたが、一座の中ですぐれて琴をひいてゐる姫君(中將の妹)があり、その人をはじめて垣間みてから、思慕の情は愈々募るばかりであつた。

内大臣の姫君の評判は早くも上聞に達し、帝から熱心を御召しの御言葉がある。けれども内大臣は中宮を憚つて軽々しく御意

に従はうとはしない。中宮は帝の御本意を案じて、姫君を宮中に入れるやうに決心をなされる。やがて秋の除目に、三位中將は中納言になり、その年も暮れた。

(以上が卷一の概要であるが、大體これで分るやうに、卷一は事件の中心に入り来るべき人物の系譜的關係を説明したもので、構想の端を開いたものといふことが出来る。女主人公たる西院の姫君に關する運命的な事件は卷二以後に物語られるのである。) やがて、中宮は御懷妊になり、八月十日すぎに皇子が御降誕になつた。ほぼ同じ頃、帥宮の上(東院の上に養はれ、帥宮の後妻となる)もお産をして雙生子を生んだ。養母たる東院の上は、帥宮の上が雙生子を生んだことを世間にはぢ、人の目にたたぬやうに内密に雙生子の中の一人を中納言の乳母のもとにあづけ、妹の方だけを世間に披露した。

中納言(もとの三位中將)はかねてから思慕してゐる内大臣の姫君を忘れることは出来なかつた。帝も兄の中將(もとの侍従)をお召しになつて、熱心に入内のことをすすめられる。内大臣も今は全く窮して、やむを得ず御意に副ひ、四月頃入内させることに決心した。ところが中納言はその由を傳へ聞き、傷心のあまり病を得て床に就くに至り、父關白はもとより、世の人も、その病ひを憂ひ歎き、方々で平癒のための加持祈禱を行はしめるやうな大騒ぎとなつた。

大貳の乳母は、中納言の病因を心得ず思つてゐたが、ある日、圖らずも中納言の書き散らした文、反古を見て、中納言が内大臣の姫君を戀ふよりの病氣である事を確め、その由を父關白に告げた。關白は我が子の愛には何物をもかへ難く、意を決して内大臣にその姫君を所望した。内大臣も亦後宮には既にやんごとなき中宮の

おはしますことでもあり、しかも中宮は關白の姫君であること等を考へ、更に中納言その人の無雙の人品等を思ひあはせ、つひに帝の御意に反して、關白の申し出を承諾した。この由を傳へきいた中納言は慈父の愛に涙して喜び、さしも重かつた病氣も次第に快方に向つたのであつた。

折しも、麗景殿入内のことがあつたので、その宮中の御まぎれに乗じて結婚の事を執り行はうとの計畫が立てられたが、東院の上はこれをきいて深く嫉妬し、弟の中納言を語らひ、姫君を事前に奪ひ出させようとした。中納言は喜んで、ある夜忍び入つて奪つて來て見ると、姫君と思つたのは實は丁度その夜しもそこに泊りあはせてゐた帥宮の上(東院の上)に養はれ後帥宮の後妻たる人であつた。中納言は事の齟齬に失望したが、やむなく帥宮の上を妻とせざるを得なかつた。上は夫たる帥宮に別れ、子に離れて涙なが

らに日を送つたが、後久しからずして不幸の中に憂死した。帥宮の上の氣の毒を犠牲によつて、關白家の中納言と内大臣家の姫君との結婚の事は完全に成功し、夫婦の仲は格別睦じく、やがて北方は本邸に迎へられ、ほどへて男君、つづいて姫君が誕生、中納言は權大納言を歴て右大將に昇任、内大臣は右大臣に、その子の中將は中納言となり、すべての幸福がこの一家に集中するかの如く見えたのであつた。

一方帥宮は北方が行方不明になつた事を聞き、その姫君(雙生子)の中の妹君だけを引き取つた。ここに至つて、東院の上はしみじみと自分のとつた手段、即ち姉の方をとりかくして妹の方だけを世に披露した卑怯な小策を後悔したが、今となつてはどうすることも出来なかつた。

(以上が卷二の梗概である。卷一が系譜的な敘述に大半を費し

てゐるのに對し、この卷は直ちに事件の核心に入り、女主人公なる西院の姫君の數寄な運命の一端を敘し、繼子生活から一轉した結婚生活の幸福の頂點をえがいたのである。ここに婦女略奪、繼子いぢめ等の世相の一面を示してゐるのは注意すべきであらう。)

右大將(もとの大納言)夫婦は相愛して年月を送り、彼等をめぐらすべてのものが幸福であるやうに見えたが、しかし、それは永續すべきものではなかつた。先づ大いなる陰翳としてあらはれたのが、女一の宮(故弘徽殿腹の姫宮)の降嫁の御沙汰であつた。時の帝(冷泉院)は、母君亡きこの姫宮を特に御寵愛になり、後見をば右大將に托して、御自らは入道して嵯峨に隱棲しようと思召され、その御意志を右大將に傳へられた。右大將はかかる仰せを受けるにつけても物恐ろしく、たうてい御承引申し上げる氣にはなれない。それにつけても北方は物思ひ益々まさり、あまつさへ第二の陰翳

たる父右大臣の薨去のこのあつた後は、いよいよ心細く、はては重い病の床に臥す身となつてしまつた。

八月十五夜、殿上の御遊びに参内した大將は、退下の際、はからずも姫宮のお姿を垣間見る機会があつたが、更に心は動くべくもなかつた。とかうする中にも、北方の病は日々に重り、今はも早や望みなく見えるやうになつた。かくて幼い姫君の將來をくれぐれも中宮に依頼し、二十八歳を一期としてはかなくこの世を去つたのである。

右大將の歎は傍で見ると痛ましい程であつた。心なき月日は移つて行き、いつしか年も改まつた。冷泉院は再び弘徽殿の姫宮を降さうとなさるが、右大將はひたすら憂愁に籠つて、お受けする氣にはなれない。しかも降嫁の日は十一月ときめられた。秋深いころ、大將は小倉山なる北方の墓に詣で、嵯峨に在す冷泉

院によそながらお暇乞ひを申し上げ、参内して中宮と姫君とにお目にかかり、父母に別れを告げて、夜深く家を出で、叡山に登り、横川の奥の谷深き庵にたどりつき、そこで出家入道してしまつた。

都では大將の行方が知れないので、人々は嘆きののしつて搜索したけれども、つひに求めることは出来なかつた。父關白は狂はるんばかり嘆き悲しんだが、もとよりその甲斐はない。弘徽殿の姫宮も、世をはかなんで、程もなく嵯峨の院にうつり、うら若い身を墨染の衣に包んでしまはれた。

(以上が卷三の梗概である。この巻は主人公と女主人公との悲劇が構想の中心をなし、敘述にも集中と統一とがあり、印象もはつきりしてゐて、全巻中最もすぐれた部分といふことが出来る。肉親の愛、夫婦の愛等、ひしひしと讀者の心をうつものがある。)

右大將遁世の後、父關白はこの世の無常を感じて出家したく思つたが、せめて大將の遺兒たる二人の孫をわが子の記念にと、ひたすらその成長を待つことになつた。二人の遺兒は美しく成長した。兄君は三位中將から中納言となり、姫君は中宮の御許で二の宮(兵部卿宮)と共に養育された。この二の宮は御兄東宮にましてみめ容麗しく、いつしか同じ宮中で成人した大將入道の姫君を慕はれるやうになつたが、姫君は裳着の式の後、東宮に參ることに定まり、兵部卿宮の妃には式部卿宮の二の君が定められた。しかし、その後も兵部卿宮の思ひは止まなかつた。唯一度は、かからぬものまぎれがあつて、やがて女御は御懷妊になり、男宮が御誕生になつた。

これより先き、東院の上の弟中納言に奪はれた帥宮の上は、隠された雙生子の中の姉の方を引取つてゐたが、悲嘆のあまり病を得て死に、あとに残つた姫君は、式部卿宮の御方に住んでゐる亡き母君の伯母なる對の君に引きとられて養はれることになつた。ここには、式部卿宮の姫君で帥宮の上の妹なる人がある。兵部卿宮は早くからこの人に通つてをられたが、帥宮の姫君が東宮女御に似てゐる所から、圖らずも契を結ばれるやうになつた。姫君は、兵部卿宮の志が分らぬのではないが、恩義ある對の君や叔母北の方にあはせる顔がなく、つひに懷妊の身のまま、ゆかりを尋ねて、住吉にゐる尼君の許に走つた。ここで男子を生んだが、産後の肥立が悪く、その上、日頃の惱みをも加へ、つひに幼兒をあとに残したまま空しくなつてしまつた。

兵部卿宮は嘆きのために病ひを得られたが、住吉の神託によつて、我が子をさがしあてることが出来たので、なき人の記念と思つて育ててをられる中に、病は急にあらたまり、御見舞の行幸のあつ

た翌日たうとう薨去してしまはれた。

世は變つた。冷泉院も崩御になり、當帝は御讓位になつて、三條院にお住ひになつた。東宮御即位、女御には中宮の宣旨が下つた。時の關白が入道大將の遺兒でもと大納言大將たりし人であることは云ふまでもない。

九月頃、中宮は物の化に惱み給ひ、加持祈禱のかぎりを盡したが、益々重くなられるばかりであつた。時にいづこともなく怪しい乞食僧があらはれて、修法を行ふと、兵部卿宮の御靈があらはれた。ちまち消え去つたので、中宮は思ひあたることがあつて、今更後悔されたが、どうすることも出来なかつた。しかし御病氣は平癒した。僧は名も告げず飄然として何處へともなく去つて行つた。誰ならんと人々は不審に思つたが、残してある歌によつて、横川にこそつてから絶えて久しく消息の分らなかつた入道右大將であ

つたと分つた。入道は佛の示顯により、父子の契り空しからず、山を下つて御女中宮の病氣を癒したのであつた。しかし入道の行方はその後永久に杳として分らなかつたといふ。

(以上が卷四の梗概である。卷四はこの物語の後編をなす部分で、兵部卿宮を主人公とし、東宮女御を女主人公として、無常な人生と數寄な人間の運命とを敘してゐる。結末には兵部卿宮の死靈と横川に出家入道した右大將とを登場せしめ、再びこれ等を永遠の謎の中に返してゐるが、ここに長篇小説としての構想上の技巧を見出すことが出来るであらう。蓋し秀逸の手法とすべきであらうと思はれる。)

三

前項にはこの物語の梗概をのべたが、帝國圖書館藏本の書入その他を参考しつつ、主要人物の系圖的關係を摘記すると次のやう

になる。括弧内の数字は卷數を示す。

朱雀院 (一)先帝とみゆ。
(二)朱雀院とみゆ。

冷泉院 (一)當今とみえ、次に御讓位のことみゆ。
(三)嵯峨院へ遷り給ふ。

女一宮 (二)にみゆ。(四)入道の姫君とみゆ。又薨じ給ふとみゆ。

三條院 (一)東宮とみえ、次に御即位のことみゆ。
(二)御母は關白の妹ならん。(四)御讓位のことみゆ。

姫宮 (一)出家し給ふ。
(四)御母は弘徽殿女御。源内大臣女。

當今 (一)御降誕。次いで東宮に立ち給ふ。
(三)御元服。(四)御即位。
(一)御母は關白姫君。

東宮 (四)御降誕。
(四)立坊。御母は右大將入道女。

兵部卿宮 (二)御誕生。(三)御着袴。(四)御元服。
(四)兵部卿宮と申し奉る。式部卿宮姫君に通ひ給ふ。御子 (四)御誕生。
(四)薨じ給ふ。御母は當今に同じ。

一世源氏 (一)にみゆ。

内大臣 (一)大將とみえ、次に左大將とみゆ。
次いで任内大臣。薨去。

權大納言 (一)左衛門督とみゆ。
(二)權大納言とみゆ。

中納言 (一)宰相中將とみゆ。
(二)中納言とみゆ。

姫君 (一)弘徽殿女御とみゆ。
次いで薨去の由みゆ。

中君 (一)式部卿宮北方。

三君 (一)源大納言北方。東院御方と聞ゆ。

四君 (一)式部卿宮のうへの對君。おと
り腹とみゆ。

右大臣 (一)大納言とみゆ。但し三位中將の時より内大臣三君に任ず。
次いで任右大將。任内大臣。(二)右大臣。(三)薨去。

中納言 (一)少將。任中將。敘三位。兵衛内侍に通ふ。
又宰相とみゆ。(二)中納言とみゆ。
母は西院の上。中務卿宮姫君。

中將 (一)童殿上。次いで侍從。(二)少將より中將に轉ず。
母同右。

姫君 (一)誕生。裳着。(二)殿の權大納言通ふ。
(二)男子出産。(三)女子出産。後にみまかる。
母同右。

中務卿宮 (一)故中務卿宮とみゆ。
中納言 (一)宰相中將とみえ、又任宰相のこと
あり。(不審)任中納言。

姫君 (一)前齋宮。
關白北方。

中君 (一)源内大臣北方。號西院。
次いでみまかる。

姫君 (一)源中將通ふ。

兵部卿宮 (一)にみゆ。
此宮達朱雀院の皇子歟。 姫君 前齋院とみゆ。
源侍從を養ふ。

●式部卿宮 (一)にみゆ。

姫君

(一)源右大臣の東院の上に養はる。後帥宮すみ給ふ。
(四)みまかる。
(一)母は内大臣中君。

弟姫君

(四)對君を母とす。兵部卿宮すみ給ふ。

●帥宮

(一)北方みまかり給ふ。ついで式部卿宮姫君にすみ給ふ。

姫君

(二)雙生子

姫君

(二)雙生子 (四)式部卿宮の上の對君に養はる。
後、住吉にかくれ、ここにて兵部卿宮の御子を産みてみまかる。
母は式部卿宮姫君。

●關白

(一)にみゆ。
(四)出家。

姫君

(一)三條院の方に入内。次いで立后。藤壺と聞ゆ。御母は前齋宮中務卿宮御女。

姫君 嵯峨院皇后

入道君

(一)誕生。三位中將。任中納言。
(二)任權大納言。内大臣姫君に住む。
(三)任右大將。後出家。
母同右。

關白

(七)誕生。(二)元服。少將と聞ゆ。
(四)敍任三位中將。任中納言。任大納言大將。關白。
母源内大臣女。

姫君

(一)誕生。裳着。(四)にも裳着のことみゆ。
(四)入内。次いで皇子降誕。(四)中宮と聞ゆ。
母同右。

●左大臣

(一)關白姫君裳着の夜拍子をとる。後關白若宮元服の時加冠す。

權中納言

(二)にみゆ。

姫君

帥宮すみ給ふ。

●左大將

(一)にみゆ。

姫君

殿の中納言にほのめかす。

●右大臣

(一)にみゆ。後薨す。

姫君

(一)冷泉院女御梅壺と聞ゆ。

●帥大納言

(四)昔、薨せし由みゆ。

横川僧

(四)にみゆ。
(四)入滅。

姫君

(四)中務卿宮の北方とみゆ。

左大臣

(一)にみゆ。(二)任左大臣。
(三)薨す。

内大臣

(一)權大納言兼大將。

姫君

(二)入内。麗景殿と聞ゆ。

中君

(三)入内。宣耀殿と聞ゆ。

四

この物語の傳本は大體二種に大別することが出来る。四卷本と五卷本とがこれである。五卷本は四卷本の第四冊目を更に二冊にしたもので内容に増減はない。形態としては恐らく四卷本の方が古いであらう。これ等の諸本には相互に語句の異同があるが、それ等はたいいてい轉寫の際の誤記に起因するもので、別に異

本と稱すべき重大な差異を認めることは出来ない。

(イ) 四卷本

(一) 内閣文庫藏本 四冊

(二) 神宮文庫藏本 二冊

上下二冊。上は卷一下は卷四。内閣文庫藏本に比するに誤寫多く、詞章大いに異なる。近世初期の書寫にかかるものであらう。村井敬義奉納本。

(三) 黒川眞頼氏舊藏本 四冊

(四) 上田萬年氏藏本 チヤムバレン氏舊藏。春夏秋冬の四冊。

和學講談所の舊藏印がある。奥書なし。塙氏舊藏書中にこの本以外にもう一部あつたことは佐佐木信綱氏藏本、帝國圖書館藏本等によつて知られる。

(五) 帝國圖書館藏本 二冊に合綴。書寫年代は新しい。



(六) 東京文理科大學圖書館藏本 四冊

(七) 京都帝國大學國文學研究室藏本 春秋二冊。奥書によれば

延寶五年六月の書寫にかかるものである。

(ロ) 五卷本

(一) 黒川眞頼氏舊藏本 五冊

(二) 佐佐木信綱氏藏本 五冊 奥書によれば藤尾景秀なる人が

黒川春村所藏の本を以て書寫し、後塙家所藏の本(上田萬年

氏藏本とは別の本)を以て校合したもの。塙本は四冊の本

でその奥書は、

右四冊正敷元本令借之寫之畢不可有他見者也

天和元年仲秋吉日

(三) 帝國圖書館藏本 十冊 五冊を十冊に分けたもの。塙本天

和元年の奥書ある本を以て校合し、後に系圖を添ふ。安政

六年七月十六日、藤原幸成の書寫にかかるもの。

(四) 彰考館藏本 五冊 近世中期以後の書寫と見ゆ。

(五) 山岸徳平氏藏本 五冊 題簽に古解吳呂裳とあり。

なほこの外に内閣文庫には上下二卷の二冊の殘闕本があり、宮内省圖書寮には卷一、東京帝國大學國文學研究室には卷三のみの殘闕本がある。なほ又、戸澤子爵家にはこの物語の繪卷九卷がある。四冊本の一と四とを繪にし、これに全文の詞書をそへたものである。これ等の諸本についての解説は煩雜をさけて省略する。

前田本は四冊本であり、書寫年代も他の諸本に比して最も古いものの一と思はれ、他本の誤脱を訂正し得る箇所が少くない。しかし又往々誤寫や脱文があつて、意味の通らない所もないではない。例へば卷四の中に一行ばかりの脱文があつて、甚しく讀者を迷はすが如きこれである。今回の複製本には、大野木克豊氏が、黒

川家所藏の四冊本によつてこの部分の脱文を補つておかれたものをも貼付して、讀者の参考に供することとした。

五

苔衣は、三代にわたる貴族社會の生活と運命とをえがいた物語で、その構想、敘述には多少の無理や缺點もないではないが、全篇を貫くに無常厭世の主題を以てし、細部にわたつてこまかに骨肉の愛、夫婦の情をうつし、利生談、繼子説話、戀愛物語を配し、落窪物語、源氏物語、住吉物語、堤中納言物語等先蹤文學を取捨し、かつ手法に於てはあくまでも寫實主義的立場を嚴守してゐる。この點に於て正反對な立場に立つ松浦宮物語等と相對し、共にならんで近古文學史上の秀作と評することが出来るであらうと思はれる。

苔衣は從來一部の刊本もなく、わづかに古寫本を轉寫することによつて讀まれてきたものである。従てこの物語の内容はほと

心と世に對するわづかしの學問の進歩を
知らしむるは、其の第一の要である。今
より一層、其の要を徹底せしむるは、
とるべし。今、國會議員、學者、
共に對するもの、物議の最、第一の要
古國文學の進歩の要、その上に、
其の行、わづかしの學問、その
昭和十四年二月一日印刷

昭和十四年二月五日發行

(非賣品)

尊經閣叢刊巳卯歲配本

東京市目黒區駒場八六一

前田榮齋邸内

發行者

育徳財團

東京市港橋區東久保二丁目三一七

右代表者

石黒文吉

東京市芝區西久保町二六

印刷者

七條憲三



志
計
衣

913.41-Ko544



1200600644934

集約済 5冊

